

二〇二六年 三月十三日

入学 試験 問題

国 語

I

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。解答は、解答用紙の

1

から

19

までにマークせよ。

人間の意志は自由であるか。

自由は何ものにも縛られていない、いっさいの束縛から解放されている状態であると簡単に定義してもよい。私たちは家族、社会、制度、国家などさまざまな外的世界から制約されて生きているが、そういうものから解放されている瞬間はたしかにあり、それを自由と呼んでももちろんいい。しかし人間の意志は自由であるかと私は問うたのだ。意志は意欲、欲望、情念、衝動などを孕む概念でもある。私たちは外的な束縛からは仮りに解放されても、何かを欲することそのことに、つまり意欲し欲望をもつこと自体に、すなわち自分の心の中の世界に縛られて生きていないであろうか。人間は何ものにも縛られないつもりでいても、そういう自分に縛られるということがある。

私たちは自分の意志で行動を起こし、自ら決断し、何ごとかを決定したつもりでいることが少なくない。希望の大学に合格したり、目的の事業に成功したり、ことごとく自分の思う通りだった、と。しかしひょっとしてその人の遺伝と環境が良かったせいであったのかもしれない。昔から「氏より育ち」^Aというではないか。どこまでが自分の自由であり、どこからが不自由であるかははっきり定め難い。

何か原因があって、あるいは理由があって、決断し決定を下したのだとすれば、それは自由ではない。必然である。本当の自由な行動にはそれを引き起こした原因が認められないはずである。真の自由な意志決定には理由が先行しないはずである。前に私は、意志は意欲、欲望、情念、衝動などを孕む概念であると仮りに言っておいたが、だとしたらこのような^A「決定」におけるすべての意志決定は必然の結果ということになってしまいうだろう。意欲、欲望、情念、衝動などをいっさい含まない意志、純粹意志という言い方をしてもいいが、そういうものを想定してみたい。そして、そういう意志が先行するいかなる原因や理由もなしに決断する、そこに行為の真の自由を見たいのであるが、キリスト教文化圏ではそういう自由は全知全

能の神のみのなし得る自由であろう。そしてそれを恩寵という言葉で表わすであろう。そういう意味における意志の自由は人間の身には決して起こり得ないと考えられるのが通例である。

若い頃に読んで感動したカミューの『異邦人』の第一部幕切れのシーン、主人公ムルソーが理由なきピストル殺人を起し、太陽が眩しかったせいだ、と言ったあのシーンは日本の文壇でも物議をかもし、たしか広津和郎と中村光夫が論争したが、内容はもう覚えていない。カミューの意図は明らかである。人は神になり得るかという意志の自由の文学的実験であった。

現代社会では殺人事件が起こるたびに犯人の精神鑑定が取り沙汰される。残酷な事件であればあるほど個人の人格責任は問えるのかどうか論争の焦点となる。長崎の女子高校生による同級生殺害事件——父親が自決した——などはさしずめ精神医学者を悩ませる案件であろう。

カ 心の秘密に医師がどこまで介入できるか。被害者の遺族や一般社会は犯人が病気だから無罪だというようなことにはおそらくどうしても納得できまい。犯人の「意志の自由」をあくまで主張するはずである。

キ この事件に限らず、世の中で起こる大概の犯罪には原因や理由がある。貧困など社会的理由だけでなく、殺人事件の大半の犯人は病疾者である可能性が高い。

ク 「意志の自由」はなかった、と考えるほうがたしかに現実的である。

ケ 、こうなると大変なことになる。一方に、すべての犯罪の犯人に「意志の自由」を認めて、どんなケースでも人格的責任を問うべきだというキョク論が存在する。他方にすべて犯罪の犯人は社会的犠牲者であるか、ないし何らかの形で病疾者であるから「意志の自由」はなく、責任は問えないという逆のキョク論が成り立つ。両者の間には無限のへだたりがある。前者は刑法における報復の観念、後者は教育の観念に基づく。現代の法曹界は後者の観念、犯人に優しく遺族に厳しい決定に傾く「意志の不自由」論を選びがちである。しかし、法律家のいったい誰が神の領域に立ち入るのである。私はいつも疑問に思っている。考えようによれば空恐ろしい話である。メディアや世論の動きに左右されて、基準のない世

界に無理に機械的な基準を設けたりしていないだろうか。

『異邦人』のムルソーのような「意志の自由」は神ならぬ身の人間世界には想定できないのである。そこからありとあらゆる現実の コ が生じる。

現代では「意志の自由」をめぐる科学的実験までもが行われている。ある人が手首を曲げる。そのとき脳活動による電位の変化が測定される。被験者が意識的に手首を曲げる動作を決定するおおよそ三分の一秒前に脳の活動が開始されることが一九八三年に発見された。すなわち、動作を起こす決定がまず^エセン在意識でなされていて、それが意識的決定へ翻訳され、それから後に実際の行動が起こる順序が確認されている（実験はカリフォルニア大学神経生理学教室ベンジャミン・リベット教授による）。

私たちは平生、私たちの意識が行動を決めているような気がしている。しかし意識は判断を下す司令塔ではない。意識とは、脳の無意識の部分が動いた結果を単に受動的に受け取って、あたかも自らが主体的に決定したかのように^オ錯カクする機能にはかならない。私たちは無意識という幻の中を漂って生きているのである。

「意志の自由」は通例、サを前提とする。それを妨げ、人間から責任観念を少しづつ弱めてきたのは貧困など社会環境の認識と、人間の心身全体を司る無意識界の発見であった。^{注四}マルクスと^{注五}フロイトの出現は個人の良心の自律性というものを絶望的なまでに危うくしたのである。

（西尾 幹一 『日本と西欧の五〇〇年史』）

注一 アルベール・カミュ……（一九一三～一九六〇）フランスの小説家。主著に『異邦人』がある。

注二 広津和郎……（一八九一～一九六八）小説家、文芸評論家。主著に『神経病時代』がある。

注三 中村光夫……（一九一〇～一九八八）文芸評論家、小説家。主著に『風俗小説論』がある。

注四 カール・マルクス・・・(一八一八～一八八三)ドイツの経済学者・哲学者。貧困問題の原因に資本主義等の社会構造を指摘。

注五 ジークムント・フロイト・・・(一八五六～一九三九)オーストリアの心理学者・精神科医。精神分析学の創始者として知られる。無意識の概念を提唱した。

問一 傍線部ア～オはカタカナ部分と同一の漢字を用いる熟語をそれぞれの選択肢の中から一つ選び、その記号を解答欄 1 から 5 までにマークせよ。

1	ア キ定	① キ泡	② キ険	③ キ模	④ キ贈
2	イ カン定	① カン迎	② 凶カン	③ 若カン	④ カン隊
3	ウ キヨク論	① 電キヨク	② キヨク長	③ 楽キヨク	④ キヨク日
4	エ セン在	① セン扱	② セン伏	③ セン績	④ セン細
5	オ 錯カク	① カク納	② カク証	③ カク醒	④ カク離

問一 空欄 に入る慣用句として最も適切なものを次の選択肢の中から一つ選び、その記号を解答欄 に

マークせよ。

- ① 火に油を注ぐ
- ② 目を丸くする
- ③ 馬が合う
- ④ 神のみぞ知る

問三 空欄 に入る語句の組み合わせとして最も適切なものを次の選択肢の中から一つ選

び、その記号を解答欄 にマークせよ。

- ① キ つまり ク ゆえに ケ 他方
- ② キ 他方 ク つまり ケ しかし
- ③ キ しかし ク 他方 ケ ところが
- ④ キ ゆえに ク ところが ケ つまり

問四 空欄 に入る語句として最も適切なものを次の選択肢の中から一つ選び、その記号を解答欄

に

マークせよ。

- ① 妥協
- ② 乖離 かひり
- ③ 飛躍
- ④ 矛盾

問五 空欄 に入る語句として最も適切なものを次の選択肢の中から一つ選び、その記号を解答欄

に

マークせよ。

- ① 正確な自己認識
- ② 欲望からの解放
- ③ 意識の主体性
- ④ 社会的な独立

問六 傍線部Aに「氏より育ち」とあるが、その言葉の意味として最も適切なものを次の選択肢の中から一つ選び、その記号を解答欄

10

10 にマークせよ。

- ① 育ち方によっては生まれや家柄に多大な影響を与えかねないということ
- ② 生まれや家柄よりも育つ環境やその人自身の努力が大事だということ
- ③ 出生地よりも自分が最も成長したと実感した場所を大切にするとということ
- ④ 人の価値や能力は生まれ持った血筋や家柄によって決まるとということ

問七

本文の内容に合致するものを次の選択肢の中から一つ選び、その記号を解答欄

11

11

にマークせよ。

- ① 主体的に意志決定をしたと思っても、無意識が影響している。
- ② 人間の意志が自由であるかないかを決めるのは個人の自由である。
- ③ 自由な意志をもつためには心の中の世界に向き合うべきである。
- ④ 犯罪者の人格責任を問うためには複数の精神医学者が必要である。

問八 本文の内容について、Mさんは自分の考えを整理するため、次のような【メモ】を作成した。各欄に入る最も適切な選択肢を一つずつ選び、その記号を解答欄 12 から 15 にマークせよ。

【メモ】

イ 意志は、意欲、欲望、情念、衝動といった理由を含む概念だ。

ロ 真に自由な意志決定には、 12 はずだ。

イトロにより、理由のない意志決定は存在せず、意志の自由は 13 。

ハ 14 論に立てば、犯人は病気であっても責任を問え処罰できる。

ニ 15 論に立てば、様々な理由による社会の犠牲者として処罰されない。

ハとニにより「意志の自由」は神ならぬ人間には立ち入りがたい領域である。

- 15
- 14
- 13
- 12

- ① 意志の不自由
- ② 認められない
- ③ 理由が存在する
- ④ 形式
- ⑤ 機械
- ⑥ 認められる
- ⑦ 意志の自由
- ⑧ 理由が存在しない

問九 次に示すのは、本文を読んだAとBの対話である。各欄に入る最も適切な選択肢を一つずつ選び、その記号を解答欄

16

から

19

にマークせよ。

A | 何ともつかみどころのない文章だったね。

B | うん、いかなる理由もない自由意志というものはない、ということになれば、すべての行為のあらゆる理由を列挙できなければならないが、「この行為には他の理由はありません」というのは、いわゆる「悪魔の証明」というやつで、ある対象が範囲を限らず存在しないことを証明するのは極めて困難だ。よって、行為には必ず理由に
ならない不可解な部分が残る。

A | 悪魔つながりでいうと、決定論の典型としては、ラプラスの悪魔という喩えがあるね。ニュートン力学の威力に心酔したフランスの数学者ラプラスによる、ニュートン力学を手にした悪魔のごとき知性なら、古今東西、未来永劫、すべての現象を見通すことができる、というものだ。自由意志を危うくする究極の
ニュートン自身は英語で、自分は神の創造した世界の
17 は解明したが、
18 は分からなかったと
16 だ。ただ、
19 17 18 16 19

B | いずれにしても、今は量子力学の登場で、物理学の決定論は揺らいでいるといえる。

A | リベットの実験にも言及されているが、リベット自身は自由意志の存在余地を残していたらしい。それは「やめる」という行為だ。

B | ほう、どうということかね。

A | こういうことではないかと思う。必然的な理由のある「やめる」は、「やめる」ことを
19 機械はそう
仕組まれている。ストッパーだ。それは、独立した純粋な「やめる(やらない)」ではない。こちらは人間固有

のものではないかな。

B | 『異邦人』のムルソーは、アラビア人を射殺する直前で、「自分が回れ右をすれば、事件は起こらないですむ」といいながら、結局、アラビア人を撃った。「やった」わけだが、これは別の見方をすれば、そうすることで唐突に、さまざまな理由につながれた常識人たることを完全に「やめ」、異邦人になったということだろう。

16

① 運命論

17

② who

18

③ 確率論

19

④ やることだ

⑤ why

⑥ 因果論

⑦ how

⑧ やめることだ

II

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。解答は、解答用紙の

20

から

32

までにマークせよ。

どうしていま「人間とはどんな存在か？」という問いなのか。その背景には、テクノロジーが進歩して、人間がやってきたさまざまなことを機械やコンピューターが代替しつつある状況があります。

ア、結婚や交際の相手を選ぶとき、経歴や好み、信用スコアや性格診断の結果などから、あなたはこんな人と相性がいいとか、マッチした相手がいます、といったリコメンドがなされる状況は、ほぼ実現されつつあります。人間の人を見る目や直観には限界があって、AIがディープラーニングで依拠するビッグデータのほうが信頼できる。誰もがそれを疑わなくなる日も近いでしょう。

病気や健康などの情報も、たさんのサンプルから最適な「答え」がはじきだされる日がくるはずですよ。あなたの健康診断の数値や病歴、遺伝子情報などから「今日、あなたが食べるべき料理のメニューはこちらです」「今日は何歩ウォーキングをしてください」といった具合に、日々、何を食べ、どのように行動すれば健康的な生活が送れるか、機械が判断する日がくるはずですよ。

こうやって生きるうえでのすべての選択を機械に指示される状況になったとき、人間が判断し、考えるべきことはどこに残るのでしょうか？ そもそも機械に指示されるまま毎日を過ごすとしたら、「生きている」と言えるのでしょうか？ 自分がプログラムどおりに動くロボットにでもなってしまったと感ずるかもしれません。

イ 生殖医療技術が進歩したことで、あらたに生じてきた問題もあります。出生前に病気を引き起こす可能性のある遺伝子異常が診断できるようになり、妊娠中絶して出産をあきらめる、といった命の選別がすでに行われています。

二〇一八年、中国でHIVに感染しないよう受精卵の遺伝子情報を書き換えた双子が生まれたという発表が大きなニュースになりました。人間の生命や生体情報のどこまでがあらたな技術によって手を加えることが許され、どこからは許されな

いのか、とても大きな問題です。

ウ、人間がみずから考え、行動すべき領域はどこに残るのか？どこまでを人間が判断し、どこからを機械や科学技術に委ねるのか？それが、これからの時代、重大な問いになるのです。人間がとりくむべきは、その問題を考えることしかない。そんな時代がくるかもしれません。

a

これからの時代、子育てから人間関係のあり方まで、ありとあらゆることに、人間がみずから考え責任を負う「人間らしさ」を守るべき領域と、機械やテクノロジーに判断を委ねる領域との線引きがますます困難になっていきます。

B

そこでつねに考える必要に迫られるのが「人間とはどんな存在か？」という問いなのです。「人間らしさ」はどこにあり、それを守るために機械やテクノロジーに委ねるべきではない領域はどこなのか、それを判断する根拠が問われています。

その問いに向き合うとき、文化人類学が深めてきた考え方が、ひとつの手がかりになるのではないか。これは、そんな来たるべき未来をみすえて、文化人類学の「きほん」を生かす方法を探るささやかな試みです。

私たちはその問いにすでに直面しています。機械やテクノロジーに委ねてしまうことで「人間らしさ」自体が変化していく状況に、すでに足を一歩踏み出している。

b

そもそも、人間という存在を考える道筋は無数にあります。あらゆる学問がそれぞれの方法でその問いを探究してきました。「わたし」はどのような存在で、「わたしたち」が生きていくとは、どういうことなのか？そう簡単に答えは見つかりません。

人類学者であっても、みんなが同じ考え方をするわけではありません。ここでは、「人間が社会的動物である」という点から、その問いにアプローチしていきましょう。

それは人類がずっと昔から人と関わりながら生きてきたということです。個人である以前に、人との関係のなかで、あるときは子どもとして、親として、特定の集団の一員として、みずからの生き方を定め、人間関係のなかで暮らしを営んできました。近代の個人主義の観点からは、克服すべきとされてきた側面でもあります。

c

人と関わり、ある集団に身をおくとき、そこに「つながり」が生まれます。ここではこの「つながり」をひとまず「人と関係する」という意味で使います。この「つながり」には、ふたつの働きがあります。存在の輪郭を強化する働きと、反対にその輪郭が溶けるような働き。「ともに生きる方法」を考えると、この両方の側面に目を向ける必要がある、というのが私の考えです。

存在の輪郭？ 溶ける？ まだ意味がよくわかりませんよね。

人との「つながり」は大切だ。多くの人はこう考えます。でも、つながっているとはいったいどういう状態なのか、じつはあまり理解されていないように思います。ここでは「つながり」によって存在の輪郭が強調される側面について説明していきます。

d

一般的に「つながり」とは、AとBという独立した存在があり、そのあいだに関係が結ばれていること、そんなイメージだと思います。「私はある人と強くつながっている」とか、「人のつながりが薄れてきた」という言い方をしますよね。でも、AやBは、最初からAやBとして独立して存在しているのか？ そう考えてみるとどうでしょう。

ある人が「子ども」であるのは、あきらかにその「親」との関係においてです。ひとりで「子ども」であることはできません。「親」も同じです。「子ども」との関係がなければ「親」にはなれません。私たちは、そうしてだれかとの関係において自分らしさを意識しているはずですよ。

つまりAやBは、はじめからそういうものとして存在しているというより、人間関係のなかではじめてAやBであることができる。そう考えられます。ここで重要なのは、AやBという個人ではなく、そのAとBを関係づける「つながり」のほうです。

いま「社会が分断されている」「社会からつながりが失われている」とよく言われます。右派と左派とか、国論が二分しているとか、貧富の格差が拡大しているとか、大きな社会問題としてよく耳にします。どうしたら分断を乗り越えられるのか、なぜ社会のつながりが失われてきたのか、議論になっています。

たしかに、とても重要な問題です。でもさきほどのような意味で「つながり」をとらえると、意見の対立や格差の拡大した状態を「つながりが失われている」とは言えなくなります。

「分断」は、かならずしも「つながり」が失われた状態ではない。激しく対立し、分断しているように見えるのは、むしろ両者がつながっているからかもしれない。そう考えると、世の中が少し違って見えるはずですよ。

かつての社会に分断がなかったわけではありません。おそらくいまよりもっと大きな分断があったはずですよ。たとえば、女性や黒人であるというだけで、政治参加が認められなかった時代のほうが長いわけですから。

グローバル化が進み、情報ネットワークでだれもがつながる時代になってきました。どんな人でも、ネットにアクセスさえすれば、自分の意見を表明することができる。それまではメディアにも注目されず、だれにも耳を傾けられなかった声が国境を越えて世界中に拡散する。つまり、世界はかつてないほど「つながる」時代になってきました。

D 以前は分断があったことすら意識されなかったはずですよ。奴隷と市民は同じ人間とは考えられていなかった。多くの人は、政治や社会問題に関心を向けることもなく、関心があってもその声を表明する場や手段がなかった。それがいまや瞬時に異なる意見がネットを介して可視化され、その対立が鮮明に見えるようになりました。それはあきらかに「つながり」の結果ですよ。

E
AとBは、互いにつながった結果として、その輪郭が強調され、存在することができる。右派と左派も、そのつながりの両端にあらわれる。異なる意見への反論や批判があつてはじめて、右と左が分かれているように見えるわけで、右も左も、じつは対立した意見をもつ相手がいなければ存在しえません。

貧富の格差もそうです。貧しさは、豊かさとの対比のなかで強く意識されるようになります。みんなが同じような生活をしていれば、それを「貧しい」とは感じないはずで、いまや世界の富の分布や経済水準の差が エ に比較される時代になりました。昔から変わらぬ生活をしている人たちも、豊かな国の人の暮らしやその富の大きさを突きつけられると、とたんに自身の「貧しさ」を意識するようになります。

つまり、対立や分断しているとされる両者は、互いにまったく相容れないと思う相手の存在を必要としている。その「つながり」の結果として対立や分断が可視化されている。そう言えるのです。

どうでしょうか？ 「社会が分断されている」「社会からつながりが失われている」という広く共有された世界の見方も、たちどまって考えてみれば、異なるとらえ方が可能です。あたりまえに思える言葉や概念に対して違う側面から光をあて、問いを立てる。もともと文化人類学は、F こういうあらたな視点を提示する学問として誕生しました。

(松村 圭一郎 『はみだしの人類学 ともに生きる方法』一部変更)

問一 空欄

ア

イ

ウ

に入る語句の組み合わせとして最も適切なものを次の選択肢の中から一つ選

び、その記号を解答欄 **20** にマークせよ。

20

- ① ア ただし イ その結果 ウ さらに
- ② ア そのため イ しかし ウ したがって
- ③ ア たとえば イ また ウ つまり
- ④ ア 要するに イ 一方で ウ さて

問二 空欄

エ

に入る語句として最も適切なものを次の選択肢の中から一つ選び、その記号を解答欄

21

に

マークせよ。

21

- ① 一目瞭然
- ② 千差万別
- ③ 十把一絡げ
- ④ 言わずもがな

問三 次の一文が入る箇所として最も適切なものを次の選択肢の中から一つ選び、その記号を解答欄 22 にマークせよ。

さて、文化人類学は、どのように「人間とは何か」という問いを考えてきたのでしょうか？

22

- ① a
- ② b
- ③ c
- ④ d

問四 傍線部 A に「その問題」とあるが、それはどういう問題か。その説明として最も適切なものを次の選択肢の中から一つ選び、その記号を解答欄 23 にマークせよ。

23

- ① 出生前診断や人間の生体情報を書き換えることは是か非かという問題
- ② ビッグデータに基づく AI の判断をどの程度信じられるかという問題
- ③ 人が主体的に判断し行動する範囲をどのように線引きするかという問題
- ④ 技術の発展の中で既存の「人間らしさ」をどう維持していくかという問題

問五 傍線部Bに「そこでつねに考える必要に迫られるのが『人間とはどんな存在か?』という問いなのです」とあるが、

なぜその問いを考える必要があるのか。その理由として最も適切なものを次の選択肢の中から一つ選び、その記号を解

答欄 24 にマークせよ。

24

① 科学技術や機械の発展の中で、生活における「人間らしさ」が失われ始めているために、かつての「人間らしさ」を取り戻す必要があるから。

② 機械やテクノロジーが人間の役割を代替しつつある中で、人間が持つ「人間らしさ」として譲れない部分を自覚し、守っていく必要があるから。

③ 神の領域とされた遺伝子操作が可能になった現在、不完全な「人間らしさ」を知ること、不可侵の神の領域を明確に線引きする必要があるから。

④ 「人間らしさ」を明確にすることで、より良い生き方を表現できる行動を指示してもらえよう、機械やロボットにプログラムする必要があるから。

問六 傍線部Cに「近代の個人主義の観点からは、克服すべきとされてきた側面でもあります」とあるが、それはどういう

ことか。その説明として最も適切なものを次の選択肢の中から一つ選び、その記号を解答欄 25 にマークせよ。

25

① 親子関係は成人した一個人として生きる際の障害となるため、乗り越えるべきだとされてきた。

② 個人の意思を第一に重視し、集団の中での関わりが優先されるあり方は解消すべきだとされてきた。

③ 特定集団の中では役割が固定してしまうため、個々が役割にとらわれずに生きるべきだとされてきた。

④ 近すぎる人間関係は煩わしいため、個々が他人と関わらずにすむ生き方を可能とすべきだとされてきた。

問七 傍線部Dに「以前は分断があったことすら意識されなかったはずです」とあるが、それはなぜか。その理由として最も適切なものを次の選択肢の中から一つ選び、その記号を解答欄

26 にマークせよ。

26

- ① 女性や黒人は、そもそも社会の一員として政治的な意見を述べる機会が許されていなかったから。
- ② 分断をおおるメディアが発達しておらず、分断ができたとしても大きなものとならなかったから。
- ③ グローバル化が進む以前は画一的な地域社会が築かれており、他地域との違いを認識しなかったから。
- ④ 階層の違いが当然とされる社会においては、意見の相違や社会的立場の違いに気づくこともないから。

問八 傍線部Eに「AとBは、互いにつながった結果として、その輪郭が強調され、存在することができる」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適切なものを次の選択肢の中から一つ選び、その記号を解答欄

27 にマークせよ。

27

- ① 対立する意見や格差は、そのままでは互いの存在すら認知されることはないが、それぞれの立場の人が声を上げることでお互いを許容できるようになる。
- ② 対立する意見を持つ者同士が自分自身の意見を主張して、相容れない意見を持つ相手に対して反論することで、自分の意見を強化することができる。
- ③ 対立する意見や格差は、個別には意識されることがないが、互いを比較することによってのみ、相違が明確に認識され、それぞれの立場が確立される。
- ④ 対立する意見を持つ者同士が出会い、関係性を持つことによって生まれる違和感や嫉妬などの感情を知ることによって、強く自身の存在を意識することができる。

問九 傍線部Fに「こういうあらたな視点」とあるが、それはどういう視点か。その説明として最も適切なものを次の選択

肢の中から一つ選び、その記号を解答欄 28 にマークせよ。

28

- ① グローバル化やインターネットの普及によって変化した社会を観察する視点
- ② 常識とされる人間観を捉え直し、「人間とは何か」を問い直そうとする視点
- ③ 対立や分断においてさえ「つながり」を必要とする人間関係を重視する視点
- ④ 人間が集団で生きていたことをもとに、近代の個人主義に疑義を呈する視点

問十 本文の内容について説明した次の文章を完成させるよう、各欄に入る最も適切な選択肢を一つずつ選び、その記号を解答欄 から にマークせよ。

テクノロジーが進歩する中、 が変化していく状況下において、「人間とはどんな存在か？」という問いが重要性を増している。 の考え方はその問いの答えへの手がかりとなる。たとえば「人間は社会的動物である」という視点で見ると、人間は個として存在できるものではなく、他者との を浮き彫りにすることができると捉えられる。

- | | |
|---------------------------------|--------|
| <input type="text" value="29"/> | ① 階層 |
| <input type="text" value="30"/> | ② 分断 |
| <input type="text" value="31"/> | ③ 輪郭 |
| <input type="text" value="32"/> | ④ 科学技術 |
- ⑤ 文化人類学
⑥ きほん
⑦ 貧しさ
⑧ つながり
⑨ 人間らしさ

